

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

筆者は、しばらく人工知能の本流からは離れて、ロボットの〈知能〉ならぬ、Aロボットの〈弱さ〉が生み出すコミュニケーションと
いうことを考えてきた。それはどのようなことなのだろう。

ある街角に小さなロボットがポツンと佇たぎんでいる。ロボットが手にしているのは広告用のポケットティッシュ。どこかの ①か
ら依頼されたことだろうか、目の前を足速に通り過ぎようとする人たちにそれをくばろうというのだ。

ただティッシュをくばろうとするも、人の忙せわしない動きになかなかタイミングが合わない。小さな手をわずかに差し出してみたり、ま
た引っ詰めたり。仕事に自信が持てずに、オドオド、モジモジしている感じだろうか。

そんな姿をかわいそうに思っただろう。ようやく一人のおばあちゃんが足を止めてくれた。その様子をしばらくながめると、ロボ
ットの腕の動きにタイミングを合わせるようにして、そのティッシュを優しく受けとってくれた。そうしてロボットの頭を軽く撫なでな
がら、その場を離れていく。ロボットもおばあちゃんの後姿を見送るように、小さく ② をするのだ。

〈アイ・ボーンズ〉と呼ばれるこのロボットは、とりたててすごい技術を備えているわけではない。ティッシュやパンフレットをくば
るといふより、上手に受けとってもらうのに近い。ロボットにしてみれば、ただタイミングが合わずにモジモジしていただけなのであ
る。このようなロボットのことを、ふつうは「賢い」とか、「知性を備えている」とは言わないだろう。

ただ侮あはれないのは、こうしておばあちゃんからの手助けを上手に引き出しながら、結果として「ティッシュを人にくばる」ということ
を成し遂げていることだ。おばあちゃんの方も、このロボットの手助けができたことを喜んでいるに違いない。わたしたちは他の人から
手伝ってもらいたいかもしれないけれど、誰かの手助けになれたり、一緒に何かを達成できたときも、喜びを感じるといふ。ティッシュを上
手に受け渡しするのも、一種の共同行為であり、そこでは相互調整という名のちよつと心を通わせるような瞬間があるのだ。

この「他者からのアシストを上手に引き出しながら、結果として合目的な行為を実現してしまう、関係論的な行為方略を備えたロボ
ット」のことを、筆者らは〈弱いロボット〉と呼んできた（『弱いロボット』医学書院、二〇一二年）。その特徴の一つは、自らのなか
に能力や機能を完結させるのではなく、Bその一部は外に開かれているということである。

先ほどのティッシュをくばるといふことも、きわめて個人的な行為のようでありながら、自らのなかで完結できるわけではない。他に
半ば委ねるようにして、相手との調整のなかで、「ティッシュをくばる」ことを実現している。これはただローテクであるという理由だ
けでもない。ティッシュを差し出そうにも、その相手が受け取ってくれなければ、「ティッシュを受け渡す」ことにならない。自らのな
かで機能を完結させようにも、完結できないという制約があるのだ。

ここで他者からのアシストを引き出し、共同的な行為を組織するとき、このロボットの弱々しさやモジモジ感がおおいに ③ し
ていることに注意したい。そこはかとなく〈弱さ〉を開示することで、他者を上手に巻き込むことができるのである。

『小説の言葉』などの著作で知られる、Cロシアの思想家ミハイル・バフチンによれば、「不完結な言葉は、内的説得力をもつ」という。
上司や教師などからの ④ 的な言葉は、その意味が自己完結しており、他者の新たな解釈を引き出すような余地を残していない。
一方で、日常の何気ない会話のなかにある、他愛もない言葉は、他者の積極的な参加を引き出しながら、オリジナルな当事者にとつての
意味を生み出すことができる。

これと同様に、「どこか不完全なだけけれど、なんだかかわいい、放っておけない」というような、ちよつと弱々しい、不完結なロボ
ットというのは、そこに参加する余地を残している。その結果として他者の心を思わず振り動かすような〈説得性〉を備えるようなので
ある。

筆者らの〈弱いロボット〉には、このティッシュをくばろうとするロボットの他にも、自らではゴミを拾えないのだけれど、まわりの
子どもたちのアシストを上手に引き出しながら、結果としてゴミを拾い集めてしまう〈ゴミ箱ロボット〉や、相手の目線を気にしなが
ら、オドオドと話すロボット〈トーキング・アリー〉、一緒に並んで歩くだけの〈マコにて〉、おぼつかない姿で部屋のなかを動き回る
だけの〈ペラット〉などがある。

実は、こうした〈弱いロボット〉は、筆者らのものに限られない。その ⑤ 例は、いまや多くの家庭に入り込みつつある〈お掃
除ロボット〉だろうか。このロボットは、勝手にお掃除をしてくれる便利なものと思いつつも、しばらく一緒に生活してみると、その
〈弱さ〉も気になってくるのだ。

部屋の隅にあるケーブル類を巻き込んでギブアップしてしまう。椅子とテーブルの間に入り込んで、そこらなかなか抜け出せな
い。玄関などの段差から落ちてしまうと、そこから這はい上がれないということも。そんな〈弱さ〉を知るにつれ、わたしたちはロボット
のスイッチを入れる前に、ケーブルを束ね、椅子を整然と並べ替えていたりする。 a、そのロボットの進行にあわせ、床の上に
置かれた障害物を取りのぞき、スリッパを下駄箱にしまい込んでいたりする。するとどうだろう、部屋はとても整然と片付いているの
だ。

「いったい誰が片付けたものなのか」と考えてみるとおもしろい。わたし一人で片付けたわけでもないし、このロボットの働きだけでも
ない。一緒に部屋をきれいにした、あるいはこのロボットはわたしたちを味方につけながら、部屋を片付けていたのである。

これまでの家電として考えれば、ケーブルに巻きついてギブアップしやすいというのは、改善すべき欠点であり、欠陥と呼べるものだ
ろう。 b この〈弱さ〉はわたしたちにお掃除に参加する余地を与えてくれており、共同性を引き出すような ⑥ ともな
っていたのである。

いま人工知能やロボットがわたしたちの仕事を奪ってしまうのではないかと心配する向きもある。でも、この〈お掃除ロボット〉との
関わりで考えれば、わたしたちとロボットとは、必ずしも部屋のなかを片付けるのを競いあっていたわけではない。

このロボットには、コードを巻き込んでギブアップしやすいという〈弱さ〉はあるけれど、部屋の床の上のホコリを丹念に吸い集めることができる。一方で、わたしたちはこうしたホコリを集めることは苦手とするものの、ロボットの進行に合わせ、障害になるものを取り除くなどの工夫をすることに長けている。お互いの〈弱さ〉を補いつつも、その〈強み〉を引き出しあっているように思える。ロボットと人との⑦という言葉があるけれど、このロボットは自らの〈弱み〉をさらけ出すことで、そのことをちゃっかり実現していたのである。

c、この〈お掃除ロボット〉がもつと完璧にお掃除するものであったらどうかと思う。コードを巻き込むこともなければ、段差から落ちてしまうこともない。わたしたちの手間も⑧と省けることだろう。でも、それだけでは終わらないのだ。

そうしたロボットの姿をながめるなかで、いろいろなことが気になってくる。「もつと、静かにできないの?」「もう少し、早く終わらないのかなあ」「この取りこぼしはどのよ」と、いつの間にか、わたしたちをクレーマーに仕立て上げてしまうのだ。ロボットの〈弱さ〉がわたしたちの優しさや工夫を引き出していたのとは対照的に、ロボットの高機能さは、むしろわたしたちの傲慢さのようなものを引き出してしまうようだ。

〈お掃除をしてくれるロボット〉と〈お掃除をしてもらう人〉と、d「その間に線が引かれた途端に、相手に対する要求水準をエスカレートさせてしまう。こうした⑨は、いま至るところで生じているように思う。」

おばあちゃんの世話をするというなげない関わりが職業となった途端に、〈介護する人〉と〈介護される人〉の間に⑩が生まれてしまう。d「もつと、もつと」と相手に対する要求を高めてしまう。あるいは「防潮堤の存在ゆえに、住民の避難行動が遅れが生じる」という。津波の被害にあうたびに、「防潮堤をもつと高くして」という議論が高まるけれど、それにも限界はあるだろう。

こうしたことは自動運転システムとドライバーとの関係にも当てはまりそうだ。この種のクルマの引き起こした事故のニュースを耳にするたび、その人工知能に対して「もつと、もつと」と要求水準を高めてしまう。クルマというのは信頼を売る商売なので難しいのだろうけれど、いつも強がるばかりでなく、ときにはE「この霧のなかでは、ちよつと自信がないのだけれど……」と、弱音を吐いてくれない。そうしたときには、ドライバーもすこしは手伝ってあげようかという気になることだろう。

深層学習や全脳型アーキテクチャの議論もいろいろだけれど、お互いの〈弱さ〉を補完しつつ、相互の〈強み〉を生かすという関係性も大切にしたい。そのための肝は、F〈弱さ〉の適度な開示なのではないかと思うのである。

(岡田美智男「ひととロボットが寄り添うとき」による)

問一 空欄 a～d にあてはまる適切な語を次の (ア)～(オ) の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。なお、同じ語を重複して使わないこと。

- (ア) あるいは (イ) もし (ウ) つまり (エ) すると (オ) ところが

問二 傍線部 A「ロボットの〈弱さ〉が生み出すコミュニケーション」とあるが、その後に書かれている「ティッシュをくぼるロボット」の場合、どのような「コミュニケーション」なのか。説明しなさい。

問三 傍線部 B「その一部は外に開かれている」とは、どういうことか。本文の内容をふまえて説明しなさい。

問四 傍線部 C「ロシアの思想家ミハイル・バフチンによれば、『不完結な言葉は、内的説得力をもつ』という」について、この引用は、本文に登場するロボットの話題とどう関係するか。「ミハイル・バフチン」の言葉と「ロボット」と、それぞれの特徴を示しながら両者の関係性を説明しなさい。

問五 傍線部 D「その間に線が引かれた」とはどういうことか。説明しなさい。

問六 「自動運転システム」について傍線部 E「この霧のなかでは、ちよつと自信がないのだけれど……」という行動が示されているが、「ティッシュをくぼるロボット」における傍線部 Eと同様の行動はどのように書かれているか。本文中の表現をそのまま抜き出して答えなさい。

問七 傍線部 F「〈弱さ〉の適度な開示」とあるが、「適度な開示」とはどのような開示であるか。本文の内容をふまえて説明しなさい。

問八 空欄①～⑩にあてはまる語を後の語群から一つずつ選び、それぞれ漢字に改めて書きなさい。なお、同じ語を重複して使わないこと。

- 【語群】 コウケン カキネ ズイブン ユウイン ケンイ エシヤク テンポ キョウセイ テンケイ コウズ